

開会のことば



山崎 修道

やまざき しゅうどう

国立感染症研究所名誉所員
三菱化学ビーシーエル顧問

1961年 千葉大学医学部 卒業
1993年～1999年 国立感染症研究所 所長
2001年～三菱化学ビーシーエル顧問
2004年～NPO 法人エイズワクチン開発協会
理事長

MBC Forumの世話人会を代表して開会のご挨拶を申し上げます。

WHOの推定によりますと、全世界の年間死亡者数の約30%は感染症による死亡であり、そのうち最も多くの死者を出しているのは、呼吸器感染症、エイズ(AIDS)、下痢症、結核、マラリアであります。そして、それら5大疾患の年間死亡数は1,500万人を超えるといわれています。そこで、本Forumにおいては、これら重要な感染症の国内外の動向や、診断、予防、治療対策などに関する最新情報を医療従事者および市民の皆様提供するために、感染症分野の第一線でご活躍されている専門家をお招きして夏期公開講座を開いてまいりました。昨年は、「身近に迫る性感染症、そしてエイズ」というテーマで沢山の方々が参加されました。今回は、「古くて新しい呼吸器感染症」というテーマで、最近社会の注目を集めている新型インフルエンザ、クラミジア肺炎、そして世界的に新たな対応が求められている結核に焦点を当てて皆様に話題を提供したいと思います。

さて、1997年に香港で高病原性鳥インフルエンザが発生し、ニワトリとヒト患者の両方からH5N1ウイルスが分離されて以来、いよいよ心配される新型インフルエンザの到来か？と世界中に警告が発せられて今日に至っていることは皆様ご存知の通りです。しかし、それから9年経った今日まで、日本を含むアジアやヨーロッパの各地で高病原性鳥インフルエンザによる家禽の被害は断続的に起こっているものの、幸いなことに、それがヒトからヒトへと感染して大流行を起こすという事態はまだ経験していません。とはいっても、変異しやすいインフルエンザウイルスが何時かヒトからヒトへ伝播する性質を獲得して出現する可能性は決して否定できません。

インフルエンザウイルスの専門家はその可能性をどのように推定しているのか、またそのときに備えて世界および日本はどのような予防対策を講じているのか、それが皆様の大きな関心事であると思います。新型インフルエンザウイルス出現のメカニズムと疫学的考察については、大槻公一先生が、そしてインフルエンザの発症病理、予防と治療の問題については田代真人先生がお話してくださいます。

次に取り上げる呼吸器感染症は、人類にとって古代エジプトの時代にまで遡る、最も古くから知られる感染症の1つである「結核」です。初めに申し上げましたように、結核は現在でも世界の感染症死亡の大半を占める5大疾患の1つで、わが国の感染症対策においても非常に重要な課題の1つです。そこで今回は、結核研究所長としてこの問題に長年とり組んでこられた森亨先生に、最近の国内外の結核の動向、予防治療対策を中心にお話していただきます。

そして最後の話題は、呼吸器感染症の専門家の中で、比較的近年になって、いろいろな意味で関心もたれているある種のクラミジアによって引き起こされる非定型肺炎です。クラミジアといえば、今の日本の若い世代の代表的性感染症(STD)の原因として知られるクラミジア・トラコマティスや、古くから人獣共通感染症として有名なオウム病の病原体(クラミジア・シッタシイ)があることはよく知られていますが、今回お話いただくクラミジアは、ヒトに肺炎を起こす肺炎クラミジアというもので、その実態は比較的最近明らかにされつつあります。そして、この病原体が関わる感染病理の新しい知見が今注目されています。この問題については岸本寿男先生が解説してくださいます。

こういうわけで、今回のMBC Forumもきっとご参加の皆様にとって知的満足度の高いものであると同時に、医療現場でのお仕事にも役立てていただけるものと期待しております。どうか皆様、最後の総合討論までご参加くださり、活発なご意見、ご質問をいただきたくよろしくお願い申し上げます。